

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	児童雑誌の詩学 : アンドレ・リシュタンベルジェの小説とその掲載雑誌、そして『赤い鳥』をめぐって
Author(s)	宮川, 朗子
Citation	フランス文学 , 32 : 75 - 90
Issue Date	2019-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048131
Right	
Relation	



児童雑誌の詩学

—アンドレ・リシュタンベルジェの小説とその掲載雑誌、そして『赤い鳥』をめぐる—

宮川 朗子

はじめに

文学と雑誌との密接な関係は、例えば、19世紀において『両世界評論』*La Revue des deux mondes* が文学作品の評価に与えた影響や、20世紀における『新フランス評論』*N.R.F.*の重要性など、現在では文学史の教科書でも言及されているほど自明のことだろう¹。しかしながら雑誌は、基本的に、テキストを掲載する媒体にすぎず、その発表形態上余儀なくされる紙面や時間の制約は、作家に課せられる拘束として捉えられてきた。また、雑誌に掲載された作品も、書籍として刊行される前段階の仮のものとして見做されてきたことは、初出の雑誌掲載版が、奇妙にも「プレオリジナル」としばしば呼ばれていることが物語っている²。それゆえ雑誌は、大抵、そこに収められた著名な作品や作家に関する補足事項として言及され、雑誌とエクリチュールやテキストとの関係が考察されることはまれだった。

しかし近年、例えば、媒体の詩学の代表研究者と目されるマリ＝エヴ・テランティの新聞に関する研究³では、1号の新聞に収められたテキストの間に見出される関係性や、新聞の性質を生かして書かれたテキストが指摘されてきた。それによって、新たな創造を促す媒体の機能が見い出され、従来のネガティブな媒体の評価が一新されている。それゆえ雑誌という媒体そのものに注目することによって、文学作品を新たな角度から評価することも可能となるだろう。とりわけ、児童向け雑誌のように、特定の読者

¹ Cf. 田村毅、塩川徹也編『フランス文学史』、東京大学出版会、1995年、263、265頁。また、Michel Brix, *Histoire de la littérature française Voyage guidé dans les lettres du XI^e au XX^e siècle*, de boeck, 2014, p. 284, 304 には、19-20世紀の代表的な文学批評の場としてこれらの雑誌が挙げられている。

² この語をクロード・ウィトコウスキーは揶揄している。Voir Claude Witkowski, *Les Éditions populaires. 1848-1870*, G.I.P.P.E. 1997, p. 78. ダニエル・コンパールは、このウィトコウスキーの指摘を補足し、執筆後数十年以上も経てから書籍化された作品を挙げ、初出の概念にも注意を促している。Voir Daniel Compère, *Les Romans populaires*, Presses Sorbonne Nouvelle, 2012, p. 75.

³ 例えば以下の研究が挙げられる。Marie-Ève Thérenty, *Mosaïques Être écrivain entre presse et roman (1829-1836)*, Honoré Champion, 2003. ID, *La Littérature au quotidien. Poétiques journalistiques au XIX^e siècle*, Seuil, 2007.

層を狙った雑誌を上掲したような観点から改めて眺めてみると、雑誌に収められた作品を個別に検証しただけでは見えてこない、さまざまな工夫が見えてくる。

実際、20世紀前半の日本の代表的児童雑誌である『赤い鳥』を、同じ号に収められたテキストの間や連続する号の間の関係性の観点から検討すると、文学作品と雑誌との関係や雑誌によって生み出される作品の効果が浮かび上がってくる。さらに、この観点から『赤い鳥』と外国の児童雑誌を比較すると、『赤い鳥』の独自性は一層鮮明になる。そこで拙稿では、『赤い鳥』に掲載されたアンドレ・リシュタンベルジェ(André Lichtenberger, 1870-1940)の小説に注目し、この作家の作風、その作品とそれを掲載した雑誌『シュゼット週刊』*La Semaine de Suzette* との関係を概観した後で、『赤い鳥』におけるリシュタンベルジェの『私のかわいいトロット』*Mon petit Trot* の再話の様式を考察する。この試論によって、『赤い鳥』の指針や一貫して見られる傾向を再確認するとともに、この雑誌による児童教育の方法についても考えてみたい。

I. フランスの児童向け雑誌・新聞

リシュタンベルジェの小説と雑誌との関係を考える前に、フランスにおける児童雑誌・新聞の歴史と主な傾向を確認しておく。アラン・フルマンによると、児童教育の書として後世に多大な影響を及ぼしたルソーの『エミール』*Émile*(1762)のわずか6年後の1768年に、フランスでもっとも古い児童向けの定期刊行物とされる『教育新聞』*Le Journal d'éducation* が発刊され⁴、これを機に、子ども向けの新聞や雑誌が次々に世に出されたという。

19世紀には、印刷技術の発達も伴い、子ども向けの刊行物が大きく発展するが、「しつけ、教え、楽しませる」*Moraliser, instruire et amuser* ことが、19世紀前半に創刊された数多くのフランスの児童雑誌の三大目的となったようだ⁵。それは、この時代のもっとも代表的な児童雑誌とされるP.-J.エッツェル(Pierre-Jules Hetzel)とジャン・マセ(Jean Macé)の『教育娯楽雑誌』*Le Magasin d'éducation et de récréation* (1864年創刊)の、そ

⁴ Alain Fourment, *Histoire de la presse des jeunes et des journaux d'enfants 1768-1988*. Editions Eole, 1987, p. 19.

⁵ *Ibid.* p. 63

のタイトルからも認められよう。この雑誌の場合、「娯楽」部門は P.-J. スタール (P.-J. Stahl エッツェルの筆名) が、「教育」部門はジャン・マセが担当することがその第 1 号に明記されている⁶。さらにこの雑誌に収められた作品は、「教育」と「娯楽」とが別建てになったコレクションの枠組みの中で書籍化されることが予告される⁷。しかし、この区別は雑誌を一瞥しただけでは分かりにくい。例えば創刊号を見てみよう。この号に収められたテキストは以下の通りである。

1. ジャン・マセ「胃袋の従者たち」Les Serviteurs de l'estomac
2. P.-J. スタール「イルセ王女」La Princesse Ilsée
3. あるパパ(un PAPA)「子どもの小さな悲劇」Petites tragédies enfantines
4. ジュール・ヴェルヌ(Jules Verne)「北極のイギリス人」Les Anglais au pôle nord
5. P.-J. スタール、E. ミュレール(E. Muller)訳「スイスのロビンソン」Le Robinson suisse

タイトルから、これらの作品を「教育」と「娯楽」に振り分けることは難しいだろう。そこで、創刊号から 12 号までの 2 年間に掲載された内容をもう少し詳しく見てみる。2 号では、これらの物語の続きがすべて収められているが、3 号以降、これらはやや不規則に掲載される。まず 1 は、8 号を除いた全ての号で、巻頭で発表されている。この物語は、すでにこの出版社から発表されて好評を博した『一口のパンの物語』*L'Histoire d'une bouchée de pain* を補完する物語であることが、1 号の「序」に記されている⁸。2 は、その作者について諸説があるドイツの伝説⁹を P.-J. スタールが再話したもので、11 号には掲載されなかったが、その他の号では全て 2 番目に掲載されている。4 は、この雑誌で発表された後、『ハテラス船長の旅と冒険』*Voyages et aventures du capitaine Hatteras* のタイトルで書籍化された冒険小説で、全ての号で発表され、大抵 3 番目か 4 番目に位置している。5 は、スイスのヨハン・ダヴィド・ウィース¹⁰が 18 世紀末に書いたが、1812 年にその息子によって発表された小説である。この小説は、『教育娯楽雑誌』では、3 号を除くすべての号に掲載され、8 号までは巻末に

⁶ Voir *Le Magasin d'éducation et de récréation*, publié par Jean Macé et P.-J. Stahl, 1864-1865, réimpression par Athena Press, 2008, frontispice.

⁷ *Ibid.*, p. 379-380.

⁸ *Ibid.*, p. 4.

⁹ この物語の作者については、P.-J. スタールによる紹介がある。 *Ibid.*, p. 10-11.

¹⁰ この物語の作者についても、P.-J. スタールによる紹介があるが、作者の息子でこの物語を出版したヨハン・ルドルフ・ウィースを作者としている。 *Ibid.*, p. 25.

位置していたが、それ以降位置は定まっていない。創刊号で3番目に掲載されていた「あるパパ」によって書かれたとされる作品群は、寓話や詩などの1ページに満たない短いテキストが集められたもので、一つの欄として提示されている。この欄は、複数の作品から成るとはいえ、1、2、4、5よりも短く、毎号設けられている。またこれらの連載や常設欄に加え、3号以降には、1回で完結する物語が収められることもある。

以上のことから、『教育娯楽雑誌』では、発行人（エツツェルとマセ）とそのスター作家（ジュール・ヴェルヌ）の作品あるいは彼らによる再話の連載でこの雑誌のほとんどが占められていることがわかる。そして、1は科学的知識を、4と5はフランスとは異なる地球上の文明の紹介に重点を置く点で、この時代に注目された科学や博物学などの知識を広める意図が窺える。とはいえ、当時画期的と評された『教育娯楽雑誌』に、再話が少なくないことに驚くかもしれない。また、1と4のように、他の書籍へと参照させることにより、読者をさらなる読書へと向かわせる配慮も見られるが、それら全てがこの出版社から刊行されていることを考えるなら、それが純粹に教育的配慮であったとは言い切れないだろう。

確かに、この雑誌は、知識の普及に努めた書物に贈られる、アカデミー・フランセーズのモンティオン賞の受賞に象徴されるように、当時の新しい知識を子どもに分かりやすい物語によって広めたと一般的には評価されている。しかしながら、少なくともこの雑誌の最初の2年において、この雑誌の革新性は、子ども向けの未発表の物語の多彩さや、雑誌としての工夫とは関係がない。

II. アンドレ・リシュタンベルジェの児童文学作品と『シュゼット週間』

アンドレ・リシュタンベルジェは、マルクス主義以前のフランス社会主義思想に関して、とりわけ所有の問題を考察した『18世紀社会主義』*Le Socialisme au XVIII^e siècle*(1895)を著した歴史家である。しかし今日ではむしろ、子ども向けの物語作家として知られている。もっとも知られた作品は、『赤い鳥』にも再話が掲載された『私のかわいいトロット』*Mon Petit Trott*(1898)であるが、この小説を今日の子どものに読ませるべきか否かは意見が分かれるだろう。というのも、その冒頭のエピソードで、父親の不在中に母親に言い寄るユダヤ人男性に対する感情が反ユダヤ主義的な言説で表現されたり、主人公が常に使用人たちや家庭教師に世話をされる少年とい

う、今日の平均的な家庭の子どもとは言い難いからである。しかし、エリック・ボルダスによれば、この小説は、発表後まもなく評判を呼び、1933年には演劇化、今日までに約 20 の言語に翻訳されたことなどから、児童文学の古典としての評価を獲得しているという¹¹。事実、この小説も、『教育娯楽雑誌』同様、モンティオン賞を受賞している。この成功によって、トロットを主人公とする物語のシリーズ化が企図されたらしく、『私のかわいいトロット』発表の同年、『トロットの妹』*La Petite sœur de Trott* が早々に刊行されている。そして、子どもの目線で自分を取り巻く人々や物事を観察する個性的な少年トロットを生み出したリシュタンベルジェに注目したのか、1905 年以降ベカシーヌやブルーエットという現在でもフランスで親しまれているキャラクターを生み出した少女向け雑誌『シュゼット週間』は、1920 から 30 年代にかけてリシュタンベルジェが書いた、ナーヌという少女を主人公とした物語を、当時子ども向けの本の挿絵で定評のあったアンリ・モランのイラスト入りで連載している。富裕層の少女たちに向けたこの雑誌は、裁縫や料理という家庭の実務に興味を持たせるための記事や、キリスト教的な教訓をふんだんに取り込んだ物語を満載させたことから考えるなら、その 30 年も前に創刊され、同時代の非宗教的教育や新しい知識への志向を前面に押し出した『教育娯楽雑誌』と比べて反動的とすらいえ¹²、かつそのメインキャラクターであるベカシーヌは、ブルターニュ地方の人々に特徴的な服装で登場し、その名が示す軽率な失敗によって笑いを誘っていたことから、ブルターニュの人々に対する偏見を助長すると極論され、その像が破壊された事件もあったことにも鑑みるなら¹³、評価が難しい雑誌かもしれない。しかしながら、55 年もの歳月に渡って一定の読者数を獲得し続けたことは、注目すべき事実でもあり、かつこの雑誌には、子どもの注意を引き寄せる工夫が随所に認められる。そこで、拙論では、リシュタンベルジェのナーヌの物語が掲載されていた 1920-1930 年代に注目してみる。まずはナーヌの物語が最初に発表された、1924 年 9 月 18 日号の内容を見てみよう。

¹¹ Cf. Éric Bordas, « Phrases sans parole mais avec babil : le discours indirect libre hypocoristique du petit Trott (1898) » *Fabula, La Recherche en littérature*, 2016. <http://www.fabula.org/colloques/document3449.php>

¹² この点については、例えば、20 世紀初頭の政教分離に対する、1905 年のこの雑誌に掲載された批判的な記事の中にも認められる。Voir Fourmen, *op. cit.*, p. 171-173.

¹³ Cf. Aurélia Vertaldi et Olivier Delcroix, « Et Bécassine fut décapitée il y a 75 ans, le 18 juin 1939 », *Le Figaro*, le 19 juin 2014. <http://www.lefigaro.fr/bd/2014/06/18/03014-20140618ARTFIG00247-et-becassine-fut-decapitee-il-y-a-75-ans-le-18-juin-1939.php>

1. アンドレ・リシュタンベルジェ「ナーヌと動物たち」 Nane et ses bêtes
2. シュザンヌ・サイイ(Suzanne Saily)「小さいミッシェル母さん」
La Petite Mère-Michel
3. フランソワ・デュ・シュミエ(François du Sumier)「ロンスヴォーでのロランの伝説」
Légende de Roland à Roncevaux
4. 「詩を読もう」 Vers à dire
5. 「クイズー四角連語」 Jeux d'esprit – mots en carré
1. アンドレ・リシュタンベルジェ「ナーヌと動物たち」 (続き)
6. ジョルジュ・ルザ(Georges Louza)「しし鼻のリゾット」 Lisotte au nez camard
7. ロランド伯母(Tante Rolande)「伯母さまからの手紙」 Lettre d'une tante
8. シュザンヌ・リヴィエール(Suzanne Rivière)「おやつのための刺繍入りテーブルクロス」 Une nappe brodée pour le goûter
9. 「隠れた都市当て大クイズ」 Grand concours des villes cachées
10. アンリエット・レネッティ(Henriette Rainetty)「蝶々」 Les papillons

上記のテキストを個別に見ると、表紙には、1のカラーの挿絵入りの小話(historiette)が掲載され、これは雑誌の中心部の見開き頁に続く。この小話は、さらに次号の中心部の見開きページといった具合に連載される。それゆえ、次号の表紙には違うテキストが掲載されるのだが、表紙と中心部の見開きページは、どの号も常に連動しているという訳ではない。

一際目立つ1以外は全て白黒で、2、3、6は連載小説である。2は農場で暮らすみなし子たちの物語。3は中世の叙事詩『ロランの歌』中の有名なエピソードの再話。4は署名がないが、寝る前に子どもが身近な人たちにするおやすみの挨拶が8音節で表現された韻文。5と9はクイズ。7は母親の言うことを守らず、不注意から池に落ちた少女についての教訓的なエピソード。8はテーブルクロスへの刺繍の案。10は紙で作った蝶を団扇で飛ばすという日本の遊びを紹介するコラムである。

上記のようなテキストのジャンルと雑誌の構成は、少なくとも1920-30年代を通してほとんど変わらない。『教育娯楽雑誌』と比べ、連載小説の1回の物語は短く、かつ1号に収められたテキストのジャンルはより多様である。また1、2、3、6が、ほぼ毎号掲載された連載小説であるのに対し、7はタイトル中にある伯母さまの名前や雑誌内での位置が号によって変わる。この号では掲載されていない「伯母さまのメガネ」というコラム

同様、「伯母さまからの手紙」は、姪の疑問に答えたり、軽率な考えや行動を戒めたりするなど、道徳教育の役割を担っている。8は、この号では裁縫の案だが、裁縫でない時はここに料理のレシピが入る。

この雑誌の注目すべき点は、上述のテキストが提供する知識を子どもに与えるだけでなく、与えた知識を使って実践へと向かわせる工夫が随所に見られることである。先に挙げた、カラーのイラスト入りのお話の他、常にかわいらしいイラストと共に提供される、料理のレシピや人形に着せる服の型紙、演じるための小劇(saynète)のテキストなどがその例といえるが、実践へとさらに促す工夫も見られる。例えば、1924年2月21日の「伯母さまからの手紙」では、以下のようなくだりがある。

テーブルにむかって、フリムセットはとても忙しい。[...] 彼女の隣のいすの上には、ブルーエットが下を向いて静かに眠っている。 [...]

「何をしているの？」と私は近づきながら言った。

「娘のためのピロードのドレスの生地を切っているところよ。『シュゼット週間』が最近、すてきなお手本を載せていたから、まねしようと思っているのよ。」

Appuyée à la table, *Frimoussette* est fort occupée. [...] Sur une chaise, à ses côtés, *Bleuette*, les yeux baissés, dort paisiblement. [...]

- Que faites-vous, chérie? dis-je en m'approchant.

- Je suis en train de tailler une robe de velours pour ma fille. *La Semaine de Suzette* a donné, ces derniers jours, un ravissant modèle et je m'efforce de bien le copier¹⁴.

「娘」とは、この引用中に登場する女の子フリムセットが持っている人形ブルーエットを指すが、それはこの雑誌が生み出したキャラクターで、並行して人形も発売され、それに着せるための洋服のデザインは、しばしば型紙とともにこの雑誌に掲載されている。ここにも『シュゼット週間』の商業的な戦略が窺えるが、同時にこの一節は、この雑誌の既刊の号の異なる欄を参照させることで、その欄が提供する情報を使って実践することを読者に促している。実際、この雑誌には、このような他の欄や他の号への参照がしばしば見られる。雑誌内のある欄で掲載されたテキストへの関心を他の欄によって掻き立てることは、複数の多様なテキストを収録する雑誌の利点をうまく生かしたものであり、同時に、雑誌内のテキスト間の関

¹⁴ *La Semaine de Suzette*, le 21 février, 1924, p.28

連性や連続する号の一体性を作り出すことに寄与している。

また、このような特徴を認める時、リシュタンベルジェが『シュゼット週間』の編集者に注目された理由も推察できる。まず、編集者が、この作家の代表作である『私のかわいいトロット』とその連作『トロットの妹』を読んでいと仮定するなら、原著で各章が 15 ページ程度で、それぞれの章が完結したエピソードで構成されているこの 2 作からエピソードを選んだほうが雑誌向けに編集しやすいという利点を見い出しただろう。

この利点は、次章以降で検討する『赤い鳥』における、三重吉のエピソードの選択からも例証できる。三重吉が『私のかわいいトロット』から選んだのは 2 章、8 章、9 章だが、2 章を読まなくても、8 章や 9 章の理解に苦労はしない。また、好奇心旺盛だが少々飽きっぽいトロットも、読者を既読感から安心させると同時に、この人物の突拍子もない行動を描いたエピソードも期待させることができるという、連載にも一回限りの発表にも向くキャラクターであり、かつ連載する場合、不定期でも、いつ打ち切っても不自然にはならない。

このトロットのキャラクターは、後年三重吉が精力を注いで『赤い鳥』に連載した『家なき子』のルミイと対照的で、この物語の重要な要素である主人公の心理描写は、この人物の運命と連動しながら展開されるため、連載はある程度の回数を必要とし、いつでも打ち切られる訳ではない。事実、『赤い鳥』に 47 回連載された「ルミイ」は、三重吉の死によって打ち切られたことだけが、未完と見做された理由ではないだろう。この小説を書籍化する際、海老原徳夫と豊島与志雄が三重吉の訳稿を完成¹⁵させなければならなかったことも、この小説がどの章でも打ちきることができるものではないことを示している。

『シュゼット週間』に話を戻すと、この雑誌に掲載された少女ナーヌも、トロットとほぼ同じキャラクターであると認識できる。読者の年齢層に合わせたのか、この少女の年齢はトロットよりも数年上の 12 歳前後だが、性格はトロットの女兒版ともいえ、「ナーヌはかなり落ち着きがなく、考えがあまり一貫していない女の子だった。でも、ノエ夫妻(＝ナーヌの両親)に手伝ってもらって、午前中ずっと動物の行列をつくっていられたものだった。Nane a été une fillette assez turbulente et sans beaucoup de suite dans les idées. Mais elle pouvait demeurer une matinée entière à former des

¹⁵ 参照：森田直子「マロ、エクトール・アンリ」、『『赤い鳥』事典』、柏書房、278 頁。

cortèges sous l'égide de M. et de Mme Noé」¹⁶とあるように、じっとしてられないが、一つのことに熱中できる女の子として設定されている。各章は、この雑誌で2, 3 ページ程度で、トロットの物語よりもさらに短いことは確認できる。かつ『私のかわいいトロット』同様、各章はそれぞれテーマの異なる独立したエピソードとして読むことができるという、連載にも一回限りの掲載にも都合のよい物語となっている。

III. 『赤い鳥』とリシュタンベルジュ『私のかわいいトロット』

前章で確認したフランスの児童雑誌の編集の特徴を考える時、鈴木三重吉が、「子どもの純正を保全開発」¹⁷し、文章家を育てるために、雑誌という方法をとった理由も理解できるだろう。日本とフランスの間に文化的社会的な違いはあるが、雑誌という媒体の基本的性格は共通している。三重吉は、雑誌に作品を掲載する役割だけでなく、読者に創作を促し、文章術を継続的に学ばせることのできる機能を見い出していたのだろう。『赤い鳥』創刊号の「創作童謡童話募集」の欄に、10 回以上推奨された人は、一人前の作家として待遇されることが約束されているが¹⁸、継続的な養成を前提とする約束は、雑誌というある程度の期間定期的に刊行される媒体でない限りは難しい。そして、曲譜付きの童謡、劇作、絵画、写真といった『赤い鳥』が収めたジャンルや、赤い鳥児童劇歌劇学校、赤い鳥童謡会、自由画大展覧会などに関する広告は、幼い読者に、文学から芸術への道も開かれているようにも映ったことだろう。

ところで、『赤い鳥』は、古今東西の優れた作品の掲載と投稿された物語や詩などの選評を行うことで、『少年世界』や『少女の友』などの当時人気を博していた子ども向け雑誌よりも文芸重視の姿勢で際立っていることは、多くの評者が認めている¹⁹。それゆえ芸術至上主義の姿勢で一貫している印象すら与えがちなのだが、新機軸を打ち出そうとした痕跡が認められる時期もある。そのもっとも目立つ期間が、休刊直前の 1928 年 12

¹⁶ *La Semaine de Suzette*, le 18 septembre, 1924, p. 79. 尚、丸括弧内は引用者による。

¹⁷ 『『赤い鳥』の標榜語』、『赤い鳥』、1918 年 7 月号（復刻版、日本近代文学館、1979 年）、巻頭。

¹⁸ 『赤い鳥』、1918 年 7 月号、p.78

¹⁹ 参照：鳥越信「大正期」、『日本児童文学案内』、理論社、1974、65-102 頁。関口安義『『赤い鳥』と童心主義の評価』、三好幸雄、竹盛天雄編『近代文学 4 大正文学の諸相』、有斐閣叢書、1977 年、224-233 頁。

月号から 1929 年 3 月号までの 4 号（以後これら 4 号を〈大判化 4 号〉と記す）で、そのサイズが、A5 判から B5 判に変わり、表紙には「家庭の雑誌」という副題が添えられている。サイズに関しては、1928 年 10 月 3 日、福富高市とその妻みつえに宛てた手紙に以下のような一節がある。

赤い鳥も最近二年間に二万円も欠損、私も、もうカラﾝゝになつたので、十一月号限り廃刊のつもりでしたが、いかにも残念なので、雑誌のテイサイをかへ、もう少しやつてみます。これで、たちいかなければ、もういよゝ絶望です。上品な雑誌ほど哀れです²⁰。

この一節を引用しながら、佐藤宗子は「経済的に行き詰った『赤い鳥』の、局面打開をねらった一種の賭けが、この大版化であった。」²¹と観ている。子ども向けも含めた当時の文芸誌は、A5 判が多く、B5 判が一般的であるジャンルの雑誌は見当たらない。それゆえ大判化は、文芸誌である『赤い鳥』を他のジャンルへと歩み寄らせるという意図ではなく、佐藤が指摘する「賭け」という見方が妥当と思われる。大判化は、サイズの上で他との差異を際立たせるためだろう。

サイズよりも雑誌の内容に影響を及ぼすと思われるのが「家庭の雑誌」という副題である。これによって、文芸に限らない話題を提供することが示唆される。確かに、〈大判化 4 号〉は、より一般誌化しているように見えるかもしれない。例えば 1928 年 12 月号中の「鳥の旅行」、「せきをする植物」や「ヒコウキ」²²のような、目次に載らない小さなコラムの増加が挙げられよう。これらのコラムが取り上げる話題は、歴史のこぼれ話、笑い話、工作などで、文学からは少し離れる。目次に載らないコラム自体は、大判化以前から存在しており、これらと内容的に近く、歴史から題材を採り「俗話」として紹介される数ページのエピソードも、やはり〈大判化 4 号〉以前に時々登場している。工作やゲームに関しては、1926 年 3 月号からこの年の年末号まで、毎号のように 2 ページを割いて図入りで掲載していたゆえ、新機軸とは言えない。おそらくは大判化に伴って増えた余白を埋めるためのコラムは以前よりも量的に求められ、結果的に目立ったということだろう。

²⁰ 『鈴木三重吉全集』、第 6 巻、岩波書店、1982 年、527-528 頁。

²¹ 佐藤宗子『「家なき子」の旅』、平凡社、1987 年、108 頁。

²² 『赤い鳥』、1928 年 12 月号、23、43 頁。

また、毎号掲載され、『赤い鳥』において独自の地位を築いている「科学」読物の他、「地理」（「チベットの奇習」、1929年3月号）、「史話」（「江戸のころの話」、1929年1月号）、「俗話」（「おくびょうもの」、1928年12月号）「遊戯」（「山の手の子ども」、1929年2月号、「下町の子ども」、1929年3月号）と分類されている読物も、1編ないし2編は掲載することで、「家庭の雑誌」という副題にかなう幅広さをもたせていると考えられるだろう。

文学以外のジャンルや前述のようなコラムの多さゆえに、一般誌の傾向を強めたという印象は与えられたのかもしれないが、＜大判化4号＞には、それまでの『赤い鳥』との連続性の方が容易に認められる。例えば、テキストの配置は、すべての連載が常に同じ位置ではないものの、1919年5月号に曲譜を載せて以来の順序、つまり、口絵あるいは写真、童謡と曲譜、物語、物語の間で大抵後半に置かれる科学読物、最後に投稿作品と選評という大まかな順序は変わっていない。さらに、『赤い鳥』では、しばしば、童謡をまずテキストだけ載せ、次号でその曲譜を載せることがあったが、1929年1月号からは、まず北原白秋の「つらつらつばき」のテキストを載せ、2月号でその曲譜、同月号ではやはり白秋の「ふれふれ粉雪」のテキスト、その次の3月号でこの童謡の曲譜を載せるといった具合に、テキストから曲譜へのリレーを以前よりも恒常的にしようとした形跡が認められる。定期刊行物は、次号への期待を高めさせることに大抵腐心するものであり、多くの雑誌においては、連載小説がその役割を担っているが、『赤い鳥』においては、詩から曲へのリレーによっても読者の興味を引き続けようとしたようだ。

創刊以来の継続性は、内容面でも窺うことができる。例えば、『赤い鳥』においてしばしば認められるテーマに愛国があるが、このテーマも、＜大判化4号＞においては、「ノアールの館」（1929年1月号）「海賊の赤帽子」、「祖国の地図」（1929年3月号）といった物語の中で展開されている。

また、『赤い鳥』を読み解くキーワードともいえる童心のテーマも、ライオンに食料を与えたいが、その食料となるかわいい子犬を助きたい気持ちで揺れる「巡回動物園」（1929年2月号）や『私のかわいいトロット』からのエピソードで、主人公の突拍子もない行動で驚かされる「かたつむり」（1929年3月号）に見い出される。童心の例証としては、この小説からの他の2つのエピソードも挙げられるが、そのうちの一つである「青い顔かけの勇士」（1929年1月号）では、翻訳も童心のテーマの邪魔になら

ないような配慮が見られる。例えば、トロットの家庭教師で犬嫌いのミスが子犬に追い回されて怖がっている場面がある。

Mais voici que, dans une attaque plus impétueuse, les incisives du roquet ont happé l'endroit où devait être le mollet!

[...]

Une voix lui dit :

- Vous devez être joliment courageuse, Miss? Hein?

Miss abaisse sur Trott un regard sévère. Se moquerait-il d'elle? Mais elle rencontre des yeux limpides où l'ironie est absente. D'un geste mécanique elle se baisse et grave l'empreinte de ses incisives sur la petite joue. Trott n'approfondit pas les raisons de cette démonstration, trop absorbé dans ses réflexions²³.

攻撃は、いよゝ猛烈になりました。ちんの糸切り歯は、ミスのふくらはぎとおもふあたりへ、がぶりと、かみつきました。

(中略)

トゥロットは言ひました。

「ミスはずゐぶん勇敢ね。ねえミス。」

ミスは、さう言はれて、トゥロットの顔を、けはしい目をしてねめつけました。わたしのことをばかにしていふのだらうか。いえゝ、さうではありませんでした。トゥロットの、きよらかに澄んだ二つの目には皮肉などはちつとも浮かんではあません。ミスは、おもはず、からだをこぞめて、トゥロットに頬ずりをしました。

トゥロットは、他のことを考へてゐたので、ミスが、なぜ、だしぬけに、そんなことをしたのかといふことを、たいして気にもとめませんでした²⁴。

中略以下は、トロットがミスにまわりつく犬を追い払った後の場面である。2番目の下線部については、佐藤宗子が、1931年に文化書房から出版されたこの小説の翻訳と比べ、皮肉っぽい口調が薄れていることを指摘している²⁵。この見解を補足するために、原文の3番目の下線部にも注目したい。この部分を三重吉は「ミスは、おもはず、からだをこぞめて、トゥロットに頬ずりをしました。」と訳しているが、1番目の下線部では、ミ

²³ André Lichtenberger, *Mon petit Trott*, (1898) Plon, 244^e édition, 1928, p.30-31. 下線部は引用者による。

²⁴ 「青い顔かけの勇士」、『赤い鳥』、1929年1月号所収、14頁。下線部は引用者による。

²⁵ 佐藤、前掲書、118-120頁。

スが犬に噛みつかれる場面で、「*les incisives*」を「糸切り歯」と訳しているのにもかかわらず、3番目の下線部ではこの語の存在意義、つまりミスに噛みつこうとした犬の行動とのミスの行動との対応関係を無視し、この奇妙な行動を「頬ずりをしました」と処理し、先生と生徒との微笑ましい場面に改変している。

この三重吉の改変に、大判化以前からの童心の重視の継続性を見ることができ、リシュタンベルジェの作品と『赤い鳥』との関係を考える時、新機軸を打ち出すことは回避されたようにも考えられる。というのも、『私のかわいいトロット』が、童心の重視という『赤い鳥』の指針に適うものである一方で、この雑誌の読者層とそれほど隔たりのない年齢の少年の家庭を描いている点で「家庭の雑誌」という副題が示す新機軸へとシフトさせる作品ともなりえたのだが、この小説は、その方向へ牽引する役割を担っていないからだ。

新機軸へのシフトに対する躊躇は、まずトロットというキャラクターに対する評価から検証してみなければならない。1929年1月号の『赤い鳥』の「通信」欄には、この号で初めて掲載された『私のかわいいトロット』とリシュタンベルジェの紹介が異例の長さで詳述されている²⁶。

「モン、プティ、トゥロット」は、フランスの貴族の家に生まれた、トゥロットといふ子が、父母の深い慈愛のもとにきよく気高く育つていく、その生ひ立ちをかいた小説で、親から子へのあたたかい愛情、子から親へのふかい情愛を細叙した高貴な作篇として同国の学士院から推奨され、目下何百版といふ重版を誇つてゐます。少年を題材とした作品中では、近代の傑作と称されてゐます。おもしろいのは、どこまでも子供そのものゝ感覚を通して全てを叙写してゐる点で、大人が子供の立場に立ってかいたといふよりも、作者が子供そのものになりつくして、子供としてのすべての感受感想をきびと展開し、大人の見目と子供そのものゝ感銘とに、いかに大きな撞着があるかを解剖した、鋭利な、しかし上品な純粹滑稽的な皮肉そのものに、全然先例的な価値を誇つてゐる特異な作品です。全篇十五章、そのうち日本人に向くやうな章をより出してもつと再話される筈です²⁷。

²⁶ 佐藤宗子はこの評を三重吉自身のものとしているが、仮に三重吉自身でないとしても、編集側の見解であることは確かなため、拙稿では特に支障はない。参照：佐藤、前掲書、111頁。

²⁷ 『赤い鳥』、1929年1月号、85頁。

この一節からは、『私のかわいいトロット』という物語よりも、この物語の主人公トロットのキャラクターに注目していることが窺える。そして、『私のかわいいトロット』と共に「家庭の雑誌」として『赤い鳥』を新たに展開させるのならば、トロットの個性的なキャラクターを際立たせて雑誌のシンボリックな人物像とし、それで雑誌を牽引するという『シュゼット週間』型の方法もありえたかもしれない。『シュゼット週間』の編集者がリシュタンベルジェにこの雑誌のための物語を依頼した経緯は不詳だが、この雑誌の傾向を考えるなら、すでに知られていた『私のかわいいトロット』の作者に、雑誌の顔となる新たなキャラクターを創造しうる力を期待したことは想像に難くない。それゆえ『赤い鳥』も、トロットを読者のアイドルのような存在として提示しえたかもしれない。しかしそのような雑誌に仕上げることは三重吉の意に反することであろう。『シュゼット週間』は、一般的な児童雑誌であり、個性的なキャラクターは、できる限り多くの読者の関心を引くための装置でもある。この雑誌のことを『赤い鳥』の編集者が知る由もないが、似たような戦略で発売する雑誌は既に当時の日本にも存在し、それらを三重吉は『『赤い鳥』の標榜語』で、「その俗悪な表紙が多面的に象徴してゐる如く、種々の意味に於て、いかにも下劣極まるものである」²⁸と厳しく批判していた。この言葉から推察しても、小説の主人公を大衆受けする雑誌のシンボリックな存在にすることは三重吉の選択にあったとは思われない。それゆえ、この小説の再話も、1929年3月号まで常に物語の中では一番目という特権的な位置で掲載されたとはいえ、この物語を他と一線を画すような欄で提示することも、トロットを他の物語の主人公と比べて一際目立つ挿絵で提示することもなかった。ここに「上品な雑誌ほど哀れ」という三重吉の苦悩も伺えるだろう。

継続性への志向は、トロットのエピソードが、先にも触れたとおり、『赤い鳥』が大判化以前から好んで取り上げていたいくつかのテーマに合致する点にも見出される。例えば『私のかわいいトロット』の一番目の再話の原題は「ミスの教訓」Les Leçons de Miss であるが、『赤い鳥』では、原題を直訳せず「青い顔かけの勇士」という、口ほどにもないミスの勇気を皮肉のタイトルをつけている。先に挙げた、童心のテーマに沿うような内容の改変から考えるなら、物語から読みとれる皮肉はタイトルに移植されたとも解釈できるが、このタイトルによって、〈大判化4号〉において認め

²⁸ 『『赤い鳥』の標榜語』、『赤い鳥』、1918年7月号、巻頭。

られる、勇気をテーマとする他の作品との関連性が見出しやすくなっている。つまり、強盗に襲われてすっかりおびえてしまった坊さんが、単に熟れた柿が頭に落ちただけなのに、頭から血が出たと勘違いし、いっそのこと殺してくれと強盗に頼む「おくびょうもの」（1928年12月号）、敵軍の中を一人で駆け抜け、狐を仕留めたフランスの将校の武勇を描く「騎士のはなれ業」（1928年12月号）、スペインのフェルディナンド王に使える3人の勇士たちの暴挙と彼らの勇気について議論される「第一の勇士」（1929年2月号）との関連である。そして、勇気について考えることは、「第一の勇士」の最後を「さて、少年少女諸君、みなさんはどうお考へになりますか。」²⁹と締めくくることでも促される。

さらに多くの作品との関連性が認められるのが「乞食の子」（1929年2月号）である。このエピソードは、同年代ではあるが自分と身分の異なる子どもが登場するという点で、『私のかわいいトロット』においては異例で、トロットが乞食の子にする質問もどれも頓珍漢だとはいえ、他者との生活環境の差異を読者である子どもに意識させ、他の階級の子どもの歩み寄りの可能性を示唆するエピソードである。事実、他者との階級的な差異を浮き彫りにする物語は〈大判化4号〉において数多い。自分より恵まれない子どもへの好奇心とその子に対する同情を描いたという点で、「乞食の子」と通底する「支那人の子」（1928年12月号）や連載小説「太平洋漂流記」の、1929年1月号に発表されたエピソードが挙げられるだろう。後者では、漂流した日本人船員たちが西洋人から脅されながら彼らの黒船に乗せられるが、彼らはそこで酷使されている黒人奴隷の「身の上を、こころからかはいさうだと思はずにはゐられ」³⁰なかったが、西洋人が日本人に船上でつらい仕事をさせ、黒人が西洋人と一緒になってその仕事ぶりを厳しく見張るようになると、彼らの恐ろしさは「加比丹」が一寸でも目くばせをしようものなら、目上の御きげんをとるのはこのときとばかりに、少しの情けようしやもなく、力任せに殴りつけたり蹴飛ばしたり、いゝ気になって、日本人を苦しめました³¹とあるほどむごいものになる。それでもこの件からは、彼らの凶暴さの原因がその身分によるものという語り手の見解も読みとれよう。また、この連載小説が掲載された同じ号に「官舎の子」（1929年1月号）があるが、この物語では、育った環境の異

²⁹ 『赤い鳥』、1929年2月号、53頁。

³⁰ 『赤い鳥』、1929年1月号、63頁。

³¹ 『赤い鳥』、1929年1月号、64頁。

なる官舎の子に一旦は歩み寄るものの、結局は距離を置いてしまう結末で、生活環境の違う子ども同士の歩み寄りの難しさを提示している。

以上のように、『赤い鳥』に収められた物語の間のテーマ的な関連性のみならず、「おくびょうもの」と「騎士の離れ業」との関係のように、勇氣という同じテーマを扱いながら、それぞれ異なる見解が提示されているために、読者はこれらの物語を通して、さまざまなものの見方を学ぶことができるようになってきている。このような、それぞれの物語が異なるものの見方を提示することこそ、児童教育雑誌としての『赤い鳥』の意義も見い出せるのではないだろうか。

おわりに

『赤い鳥』と拙稿で取り上げた、この雑誌とほぼ同時代に発表されていたフランスの児童向け雑誌とを単に並べて見比べてみただけでも、いくつかの興味深い点に気づく。まず、正統な文学研究の観点に立つならば、二次文学^{リテラチャー}と判断されかねない、大雑把な翻訳や翻案もふくめた再話が、拙稿で取り上げた3点の児童雑誌においては、少なくとも量的には重要であることだ。児童雑誌全般的な傾向はともかく、とりわけ児童の教養教育を重視する『教育娯楽雑誌』と『赤い鳥』における再話の多さは、偶然だろうか。新たに創作される物語よりも、既に書かれた、あるいは語り継がれてきた物語のほうに、教育的な効果があるとの判断なのかもしれないが、この点については今後さらに検討する必要があるだろう。

また、『赤い鳥』には、全般的に、子どもに学ばせたいいくつかのテーマに適う物語が選ばれていることが推測された。読者一人一人の学びは、子どもが飽きずに読める長さを一回分とし（この点においても、しばしば制約ととらえられる紙面の量的な限界は、児童向け雑誌においては必要条件となる）、継続的に、そしてさまざまな角度から語られる物語によってなされていた。だからこそ、鈴木三重吉が構想し、実践した子ども向けの文学の教育は、雑誌という媒体でなければならなかったのである。